

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

デイリー・ジーザス・ニュース #114

7. イエスはカペナウムで「命のパン」の説教を始める (#114)

ヨハネ6章22-29節

22 翌日（5000人に食事を与えた後）湖の反対側の岸（ベツサイダ）にいた群衆は、そこには一隻の舟しかなく、イエスは弟子たちと一緒にその舟には乗らず、弟子たちだけで出かけたことに気づきました。23 それから、ティベリアから来た何隻かの小舟が、主が感謝をささげた後に人々がパンを食べた場所の近くに着きました。

24 群衆はイエスも弟子たちもそこにいないのを見て、小舟に乗り、イエスを捜しにカペナウムへ行きました。

25 彼らは湖の向こう側でイエスを見つけると、尋ねました。「ラビ、いつここに来られたのですか？」

26 イエスは答えた。「よくよくあなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、わたしが行つたしるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」

27 「わたしはあなたたちに命じます。朽ちる食物のために働くのをやめ、いつまでも残る食物のために働きなさい。それは永遠の命であり、人の子があなたたちに与えるものです。父なる神は人の子に、その証印を押したからです。」

28 そこで彼らはイエスに尋ねました。「神が要求される業に絶えず従事するには、私たちは何をしなければなりませんか。」

29 イエスは答えた。「神が遣わした者を信じ続けること、これが神の業である。」

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ =^{MT}、マーク=^M、ルカ=^L、ヨハネ=^J、使徒行伝=^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**イエスの言葉は赤字で斜体で書かれています**。旧約聖書からの引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	カペナウムのシナゴーグ
タイムライン	4月上旬（26ヶ月目）
イエスの生涯の文脈	第4段階：ガリラヤにおける大宣教

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

	I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波
タイトル	7. イエスはカペナウムで「命のパン」の説教を始める

コメント：

イエスがベツサイダ近郊で5000人に食事を与えた翌朝、群衆はイエスがもうそこにいないことに驚きました。彼らは、イエスが前の晩に弟子たちを舟に乗せて送り出し、ご自身は陸に残っていたことを覚えていました。嵐の夜、イエスがガリラヤ湖を渡ってゲネサレまで歩いて行ったとは知りませんでした。どうしてそんなことを予期できたのでしょうか。

そこで群衆はイエスを探しにカペナウムへと向かった。そこがイエスの本部であり、弟子たちと合流できる最も可能性の高い場所だと知っていたからだ。人々が午後遅くにそこに到着した頃には、イエスはゲネサレでの説教を終え、自らカペナウムに戻っていた。ヨハネによる福音書第6章にある「命のパン」の説教は、カペナウムの大きな会堂で行われた。

この重要な教えは、イエスとの問答という形で行われました。イエスの教えの要点はヨハネによって記録されましたが、イエスは実際には、書き留められた内容よりもはるかに多くのことを語られました。ヨハネによる福音書6章25節から59節を声に出して読むのに数分しかかかりません。実際の対話はおそらく1時間から2時間かかったでしょう。（福音書に記録されているイエスの教えはすべて、イエスが語ったすべてのことを書き写したものではなく、要点の要約です。）

「悔い改めて信じなさい」は、イエスがガリラヤでの説教の初めに唱えた二つの戒めでした（ヨハネ49番、マルコ1:4-15）。今日の朗読において、イエスは再び、ご自身を信じることこそが神が私たちに求める最も重要な要求であると宣言されました（6:29）。これは、共観福音書記者たちがイエスの第二巡回と第三巡回の物語の中で強調していた「あなたの信仰に応じて、あなたにそうなるように命じる」という原則を改めて述べたものです。

「信じる」という動詞はヨハネによる福音書の中で約100回使われており、これは新約聖書全体の使用回数のほぼ半分に相当します。6章29節は、神との関係において信仰が不可欠な役割を果たすことについて、イエスの宣教活動全体を通して最も重要な言葉の一つです。イエスはこれ以上ないほど明確に述べています。ここでもう少し深く掘り下げてみましょう。ヨハネ16章9節を追加してください。「罪のゆえに。彼らはわたしを信じないからだ。」

群衆はイエスに、神が彼らに求めておられる業をどのようにして継続的に行なうことができのかと尋ねました。律法は、彼らに613以上の具体的な戒めを与えていました。モーセの時代から1400年の間に、代々ラビたちは自分たちの「伝統」、つまり契約の戒めを何千も適用する独自の「伝統」を作り上げてきました。これらは徐々に、元の613の戒めと同等の権威を持つようになっていきました。さらに、パリサイ派の人々は、自分たちが追求し、教えるすべてのことにおいて、常に神の業を行っていると主張しました。一般的

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

人々は、これまで教えられてきたすべてのことの中で、神にとって何が最も大切なのか、理解しにくくなっていました。

イエスは明確な答えを返されました。常にイエスを信じることこそが、神の要求なのです。すべてはイエスを信じることに尽きます。神がキリストにおいてご自身を私たちに明らかにしてくださったことに基づいて、神がどのようなお方であるかを信じなければ、愛し、礼拝し、従い、服従し、悔い改め、学び、神と適切な関係を築くために必要なあらゆる本質的な事柄を行うことは不可能です。

「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。なぜなら、神に近づく者は皆、神が存在すること、また、神を求める者に報いてくださることを信じなければならぬからです。」ヘブライ人への手紙11章6節。一方、「信仰の表われでないことはすべて罪です。」ローマ人への手紙14章23節B 信仰は私たちを神に結びつけるものであり、愛は神と適切な関係を築くものです。

イエスは神の究極的かつ唯一無二の自己啓示です。なぜなら、イエスは人の体をとった神だからです。神はイエスを通してご自身を私たちに啓示することを選ばれました。それは、私たちがイエスを信じることを決してやめない信仰を持つためです。イエスを信じることは、私たちと神との関係におけるあらゆる行為の根源となります。そして、これこそが、神との関係における無限の可能性を切り開く鍵なのです。

イエスは、もう一つの素晴らしい言葉遊びを、重要なフレーズで表現しました。 「神のわざとは、神が遣わした者を信じ続けることである。」信じるとは、私たちの全身全霊、つまり体、精神、心、意志、力、魂、そして靈を、私たちの主であり救い主であるイエスに捧げることです。ですから、それは「わざ」なのです。なぜなら、それは私たちが行うものだからです。私たちの信仰は、イエスに頼り続けることで、継続的かつ永続的な生き方をしなければならないのです。ですから、それは私たちが続ける「わざ」なのです。

しかし、赦し、永遠の命、聖霊の内住の賜物、三位一体の神と互いとの交わり、これら、そしてキリストを通して私たちに与えられた神の豊かさのあらゆる側面は、真の賜物であり、努力して得ることはできません。感謝の気持ちを持って受け取ることしかできません。私たちは信じるという決断をしなければなりません。それが私たちの「仕事」であり、神が私たちに代わって行うことは不可能です。誰も私たちの代わりに行うことはできません。神の仕事は、残りのすべてを、神の聖霊によって私たちのために、私たちの中で、そして私たちを通して行うことです。

応用

私たちの人生における神の働きはすべて、イエスを信じる私たちの力を生み、増やすために設計されています。まるで宇宙が創造の最初の瞬間に無から爆発したように。私たちが神に捧げるのは信仰だけであり、神は他のすべてを創造されます。

あなたの信仰のどの側面に今最も苦労していますか？

私たちの苦惱への答えは、常に靈的な目でイエスを見ることから来ます。聖霊が私たちに御言葉を通してイエスを見る力を与えてくださるからです。イエスを見るとき、私たちの信仰は自然に彼の模範に従います。

第4段階：ガリラヤにおける大宣教

I. イエスの第三回ガリラヤ巡礼とその余波

今日、あなたの信仰の糧として、神の言葉のどの部分を心に留めることができますか？今、あなたが必要としている方法で、イエスを新たに見ることができるように、聖霊の力をどのように祈りますか？